ニーチェとファシスト

——ドリュ・ラ・ロシェル「マルクスに抗するニーチェ」を巡って

吉澤　英樹

1. はじめに

ピエール・ドリュ・ラ・ロシェルが 19 世紀末の思想家フリードリッヒ・ニーチェに少なからぬ関心を抱いていたことは、これまでタルモ・クナスなどの研究によって知られた事実である(1)。またドリュ・ラ・ロシェルは、第二次世界大戦中フランス占領下でナチス・ドイツに協力した作家として一般に認識されている。本稿では、ジョルジュ・バタイユが 1937 年に『アセファル』誌第 2 号に掲載した「ニーチェとファシストたち」という論文に見られるような、「当時のファシストによるニーチェ利用」への批判に注目する。そして、ドリュ・ラ・ロシェルが 1934 年にファシストを公言する時期に発表した『ファシスト社会主義』という政治エセー集の中の論文「マルクスに抗するニーチェ」というテクストを取り上げる。そして、ドリュ・ラ・ロシェルという作家にとってニーチェという思想家は、バタイユの批判の対象となるようないわゆる政治的目的のために用いた単なるファシストの「道具」に過ぎなかったのかどうかということを検証したい。さらに、1934 年のドリュ・ラ・ロシェルの思想的転換にいかにニーチェの思想が係わっていたか、についても考察してみたい。

2. プレ・ファシスト期におけるドリュ・ラ・ロシェルのニーチェへの言及

1939 年 3 月 3 日発行の右翼系週刊誌『ジュ・スュイ・パルトゥ』432 号に掲載されたドリュ・ラ・ロシェルの記事「いまだ、そして常にニーチェ」によれば、彼がニーチェの作品に最初に触れたのは、14 歳の時、『ツァラトゥストラはかく語りき(2)』をオペラ通りで見つけ、メルキュール・ド・フランス社の本の黄色い表紙の上に書かれたその奇妙なタイトルに惹かれ、母に懇願し入手した 1907

年ということになっている。

> 私はそこに書いてあることを全く理解していなかった。だが、錯綜した一冊の書物から幾つかの文章が湧き出て、それが燃え盛る叢林の只中でヤハヴェの声をなすのである。私はこの焔のような呼びかけに圧倒されてしまっていた。この男は私に何かを求めていた、私に何かを強く求めていたのだった。若さというものは何かに身を捧げるものであり、また自分に身を捧げることを要求する何者かを捜し求めるものである[3]。

ドリュ・ラ・ロシェル自身「［第一次世界］大戦前はほとんどニーチェを理解していなかった。凡庸な一般的見解がおおざっぱに賞賛したり、批判したりしていた暴力への呼びかけしかそこに見出していなかった[4]」というものの、母に買ってもらった『ツァラトゥストラはかく語りき』を、歩兵として参戦した第一次世界大戦中の1914年8月23日にシャルルロワの戦いで負傷するまでリュックの中に入れてもち歩いたドリュ・ラ・ロシェルにとって、ニーチェの著書との出会いは「おそらく［暴力への呼びかけ］といったものよりより感知しがたい何物かが私の精神の中に滑り込んだ[5]」という表現で語られているようなある種決定的な体験だった。

しかし、46歳の作家が回想して書いた1939年の文章をそのまま額面通りに受け取ることには留保が求められるだろう。というのは、なによりもこの文章はドリュ・ラ・ロシェルが1934年にファシストであることを公言し36年6月にN.R.F.誌の批評家ラモン・フェルナンデスらとともに文化顧問としてフランスのファシスト政党フランス人民党（P.P.F.）へ入党した以降に書かれたものであるからだ。さらに、当のエセーが発表された1939年3月という時期は、ドリュ・ラ・ロシェルがフランス人民党の党首ジャック・ドリオに失望し1月に同党を脱党した直後とはいえ、ロベール・ブラジァックなどを代表的な寄稿者として擁し、激烈な反ユダヤ主義・親ナチズム的な政治的言説を売り物にした雑誌である『ジュ・スュイ・パルトゥ』に掲載されているからである。すなわち、バタイユが1937年1月『アセファル』第2号に掲載した「ニーチェとファシストたち」において批判の対象とされるような、政治目的でのニーチェ利用のため

に、ニーチェの書物との出会いを、現在の作家を形成した決定的な体験として起源を回想において捏造したのではないか、という批判を容れる余地をこのエセーは残しているのである。実際、ドリュ・ラ・ロシェルはこの記事の後半部分ではニーチェの『悲劇の誕生』の分析を行なっている。そこでドリュ・ラ・ロシェルは、或るニーチェ解釈——すなわちニーチェは、アポロン的・ディオニソス的という概念を用いて、ギリシア文化への非理性的部分の混在に着目することによって、従来一般に流布していたギリシア人のイメージを打ち壊した、というもの——を援用して、以下のような結論を導き出している。

> 合理主義と神秘主義はギリシア思想の中にいつも混在していた。ギリシア思想がキリスト教の中にあるユダヤ思想を大幅に修正し、拡張し、補完した(6)。

このような言説は直接政治的であるとはいえないものの、反ユダヤ主義を掲げる『ジュ・スュイ・パルトゥ』という媒体に掲載されたということを考慮に入れれば、ユダヤ思想に対してギリシア思想を優位に置く操作の一環として、ニーチェの思想をファシストの反ユダヤ主義に還元しているという批判を容れる余地を残しているかもしれない。ではやはり、政治参加以降にファシストとして言論活動を行なうとき、当時ファシストたちの言説の場にあった共通の記号参照体系から借りてきた不可欠な一要素として、ニーチェの名はドリュ・ラ・ロシェルの言説に取り込まれた一種の意匠に過ぎず、冒頭のニーチェ体験もフィクションとまではいかないものの、ドリュ・ラ・ロシェルが後年になってことさら大きな意味を付与したにすぎないということになるのであろうか。すなわち彼がファシストとなるための儀礼の一つとしてニーチェの思想というものを自らの言説に取り入れたのであろうか、という疑念が生まれるのである。

そのような疑問に答えるためには、ファシストとして政治参加する以前のドリュ・ラ・ロシェルによるニーチェの著作への言及の有無を確かめなければならないだろう。

プレ・ファシスト期のドリュ・ラ・ロシェルのテクスト、すなわち作家がファシストを公言した 1934 年以前のテクストにおいて、ニーチェへの言及は部分的ではあっても例に事欠かない。1921 年の散文処女作である自伝的エセー『戸籍』

において、話者が 16 歳の頃の読書体験を語るくだりで、キップリング、ホイットマン、ダヌンチオという作家とともにニーチェの名前が併記され[7]、また 1922 年の人口思想の視点からフランスの状況を考察した評論集『フランスの測定』のエピグラフには、1873 年の普仏戦争後に書かれた『反時代的考察』のドイツの勝利を戒めるニーチェの文章の一節が引用されている[8]。また、1927 年に書かれた『若いヨーロッパ人』や評論集『ジュネーヴかモスクワか』においてもニーチェの名前は登場する。更に 1930 年代に入ってもヘミングウェイの『武器よさらば』の仏訳版の序文においてニーチェの『悲劇の誕生』についての言及があり、後に考察する「マルクスに抗するニーチェ」が最初に書かれた 1933 年にも、D.H.ローレンスの『死せる男』の仏訳版の序文でローレンスとニーチェを比較している。タルモ・クナスも、このようなプレ・ファシスト期のドリュ・ラ・ロシェルのテクストにはニーチェのプラグマティスムや主観的イデアリスムといった思想の影響が見られると論じている[9]。そういったことからも、プレ・ファシスト期のドリュ・ラ・ロシェルがニーチェの著作を読んでいたことは確かである。それだけではなく、1928 年に発表されたヨーロッパ主義を待望する政治評論『ジュネーヴかモスクワか』で、ナショナリズムを超えるためにニーチェの思想が援用されるなど[10]、すでに 1920 年代においてドリュ・ラ・ロシェルの政治的な言説にニーチェの名が現れていることも併せて確認出来るのである。

それではプレ・ファシスト期のドリュ・ラ・ロシェルは、一体どのような場においてニーチェの読解を行っていたのだろうか。すなわち、1920 年代から 1930 年代にかけてフランスにおける文学者のニーチェ受容がいかなるものであり、ドリュ・ラ・ロシェル自身はどのような人物の影響の下でニーチェ読解を行なっていたのか。それは、彼のテクスト外からの資料によって、その一端を考察できるように思われる。

実は、ドリュ・ラ・ロシェルがニーチェという名前とともにテクストに最初に現れてくるのは、彼自身の作品の中にではない。彼の名前が最初にニーチェとともに現れてくるのは、パリ・ダダ移行後のアンドレ・ブルトンが主宰した雑誌『リテラチュール』誌の 1921 年 3 月発行の第 18 号に掲載された、同人たちによる著名作家の点数付けの中においてである。このアンケートは、ルイ・

アラゴンやアンドレ・ブルトンら 11 名の同人が同人たち自身をも含めた 134 人の作家・哲学者・画家・宗教家たちを、最高点 20 点から最低点マイナス 25 点までの評価を付け一覧表にしたものである。そのアンケートにおいて、ニーチェに対してはブルトンの 5 点を始め平均点 3.54 点という全体的に低い評価の中[11]、ドリュ・ラ・ロシェルはガブリエル・ビュッフェとともに最高点の 20 点を付けている。単に思想家の名前の脇に点数付けをするだけで、個々の同人のコメントを付す欄がついているわけではないこのアンケートという企画自体の性質からは、ドリュ・ラ・ロシェルが具体的にニーチェのどの著作を読み、どのように読解していたかについて確実な指標を与えてくれることはない。とはいえ、ダダイストたちが等閑視している一方で、ドリュ・ラ・ロシェルが 20 点の最高点を与えているベルクソン（平均マイナス 6.4）、ショーペン・ハウエル（平均マイナス 7.45）といった思想家の共通点を考えると、作家として最初期の彼のニーチェ読解は、冒頭に引用したニーチェの作品を語った部分とそう遠くないところにあるようだ。さらにこういった哲学者たちへの評価からうかがえるのは、ダダ、シュルレアリストたちとは違う別のサークルの思想傾向である。後に取り上げる記事のなかで、作家自身、「1900 年から 1920 年にかけて大気中に伝播したニーチェの行動原理[12]」と述べているように、どのような場においてドリュ・ラ・ロシェルがニーチェという思想家の思想を「大気中に伝播していた」ものと感じ取っていたか、別のサークルの存在を確認することが必要であろう。

実際、1900 年から 1920 年という年代は、ルイ・パントのフランスにおけるニーチェ受容史の研究書に詳しく解説されているように、シャルル・アンドレール、アンリ・アルベール、テオドール・ド・ウィゼワといった人々によって、ニーチェの思想がフランスに紹介された初期の時代である[13]。そういった初期のニーチェ紹介者の中でドリュ・ラ・ロシェルと直接交流を持ち、彼のニーチェ読解に影響を与えた人物として、1909 年にカルマン・レヴィ社から『ニーチェの一生』を上梓したユダヤ人作家ダニエル・アレヴィ（1872 年生）があげられるだろう。

アレヴィは、1891 年にバルベイ・ドールヴィの愛人だったルイーズ・リードからニーチェの著作を紹介され、1892 年に『ワグナーの場合』をロベール・ド

レフュスとの共訳で上梓している。それ以前には、1876 年にニーチェの友人でありアルザス出身のマリー・バウムガルトナーが、『反時代的省察』に収められた論文「バイロイトにおけるリヒャルト・ワグナー」を仏訳しているが、これはスイスのフランス語圏のみで流通したものであり[14]、実質的にダニエル・アレヴィは、最初にフランスへニーチェの思想を紹介した人物の一人であるといえるだろう。

さて、そのようなニーチェ紹介者として名の知れたアレヴィは、1922 年末にグラッセ書店で自らが運営する叢書カイエ・ヴェールからドリュ・ラ・ロシェルの評論集『フランスの測定』を出版させており、これもまたニーチェの読み手として認知されているアンドレ・マルローの評論『ヨーロッパの青年層』を 1927 年に同叢書から出版した人物でもある。ドリュ・ラ・ロシェルは 1944 年 4 月 19 日付の日記のなかで、「マルローを私は高く評価した。彼は自他ともに見誤らなかった。ニーチェとドストエフスキーについては、私たちは兄弟分だ[15]。」と書き、マルローへの思想上の親近感を表明しているが、この二人をシテ島のオルロージュ河岸のアパルトマンで 1927 年に引き合わせたのもアレヴィである[16]。

アレヴィは、『半月手帖』の主要な同人としてシャルル・ペギーと親交を結び、一方で 1908 年に『暴力論[17]』をジョルジュ・ソレルに書くことを薦めた人物でもある。この点において、バタイユの論文「ニーチェとファシストたち」の註において「フランスにおいてニーチェに惹かれた左翼[18]」と名指されるソレルやジョレスといった人物たちが、ニーチェの名の下に結び合わされる一つの場が形成されていたことは否定できない。果たしてソレルやアレヴィが左翼という枠に収まるかどうかの是非は別として、そのことは、後に考察する「マルクスに抗するニーチェ」という論文の中で、ソレルやムッソリーニ（ムッソリーニはソレルの弟子を自認していた）が経済学者パレートなどの名とともに結び合わされていることとも無縁ではないだろう。このように、1900 年代から 1920 年代にかけて、ニーチェ思想の「大気中の伝播」というものをアレヴィという人物を軸にして考えれば、彼との交流を通してプレ・ファシスト期において既に政治的利用を目的として形成されたニーチェ読解の場に、ドリュ・ラ・ロシェルが身を置いていたことがうかがわれるだろう。

プレ・ファシスト期のドリュ・ラ・ロシェルのニーチェ読解については、論

文の趣旨から外れるために本稿においては以上の指摘だけにとどめておく。しかし、ドリュ・ラ・ロシェルが、1934 年にファシストを公言する前からニーチェのテクストを読んでいたということ、またニーチェの思想を政治目的のために援用するにしても、ニーチェを読解する環境においても、ファシストを公言する際にムッソリーニやヒトラー周辺のニーチェ利用の言説の場というよりも、むしろどちらかといえばバタイユの言う「ニーチェに惹かれた左翼」たちに近い場にいたことが確認できるとみなしうる。そのようなことをふまえた上で、ファシスト期ドリュ・ラ・ロシェルのニーチェ読解を理解するための作業の一端として、次は 1930 年代のファシストによるニーチェ読解を批判したバタイユの論文「ニーチェとファシストたち」を考察してみたい。

3. 1930 年代におけるファシストのニーチェ利用「ニーチェとファシストたち」

ファシストのニーチェ利用を批判したバタイユの「ニーチェとファシストたち」は 1937 年 1 月『アセファル』誌第 2 号に掲載された。1930 年代にはいって、フランスの周辺では 1933 年 1 月のヒトラーの政権掌握、1935 年 10 月イタリア・ファシストのムッソリーニによるエチオピア侵攻、1936 年 7 月のフランコの反乱によるスペイン内戦の勃発などがあった。また、フランス国内でも 1935 年「ファシズムの脅威」に抗する左翼の人民戦線が結成され、1936 年 6 月にはフランスのファシスト政党フランス人民党が結党されるなど、この記事が発表された当時はファシズムという政治運動がある種の隆盛期を迎えていた時代といえよう。そういった時代背景の中、ニーチェの思想を自分たちの政治活動の規範とするようなファシストたちの言説が巷に多くあふれていることにバタイユは着目し、その理由を以下のように考えている。

> ニーチェの教えは攻撃的な本能と意志を《動態化》する。それゆえ、現行のさまざまな運動が自分たちの運動にこれらの動態化して「用途から解き放たれた」意志と本能を持ち込むのである[(19)]。

バタイユは、左翼は「理性というものにとらわれた政治運動」であるのに対し、ファシストに代表されるような右翼はそういった傾向に反発し、「身体の復

権」や「反理性」というものを掲げ、その際にニーチェの思想が「動態化」された「攻撃的な本能や意志」というものを生み出し、それを自らの政治運動の原動力としている点に着目している。だが、バタイユによれば、本来目的を持たないがゆえに「意志と本能」といったものは「動態化」されるのである。それにもかかわらず、結局ファシストたちがその「動態化」された「意志や本能」をファシズムという特定の目的をもった政治運動に持ち込むことは、ニーチェの思想を政治運動の実践の場に体現することではありえず、逆にそれを部分的に利用もしくは歪曲することにしかならなかった、と批判している。たとえば、ニーチェ読解においては国家社会主義に沿うような文章を残しているローゼンベルグは（バタイユは彼に対して「ナチスの公式イデオローグではない」という断り書きをいれながらも）、盲目的愛国主義からニーチェ思想を排外主義に連結させ、ギリシア思想の明晰さの部分を賞揚し、ニーチェ的生の本質部分といわれるようなディオニソス的なものをドイツ・ロマン主義とともに否定してしまっている。また、反キリスト教的生命論という観点は、「ドイツ精神運動」という人種主義的な宗教形態へと固定化されてしまう、ともバタイユは批判を加えている。さらに、ナチ期のドイツで普及したニーチェの死後に遺稿を編集して作られた『権力への意志』のクレーナー社版[20]の後書きを書いているボイムラーは、「永劫回帰」という概念を捨象し、ニーチェの思想を「力への意志」という一点に回収してしまう、とバタイユはナチス周辺のニーチェ読解に触れた言説を取り上げながら、批判的な分析を加えている。

このようにバタイユは、ファシストたちが「本能や意志」といったものを「動態化」するニーチェの思想を、ファシズムという政治運動の持つ目的のために単純化してしまったり固定化させてしまっていることを指摘し、彼らファシストのニーチェ利用の特徴は「過去への執着」という観点の下に集約されると見ている。

> 過去から解き放たれた者は理性に縛られたものである。理性に縛り付けられない者は過去の奴隷である。政治の戯れは、それが生じるためにこのように虚偽の立場を必要とする。それが変わることは不可能なように思われる。生命でもって理性の諸原則を侵犯すること。生自体の理性に抗する強い要求に答えること。政治において、

> 実際それは手足を縛って過去へ身投げすることである。しかし生はそれでもなお行政的・理性的な測定体系から解放されることと同様に、過去からも解放されることを強く求める。生を形作り、生が要求する奇妙で熱く沸き立つ運動は、ときおり政治的行動によって担われているように見える。しかしそれははかない幻想でしかない。生の運動は限定された条件の下でしか様々な政治構成体（des formations politiques）の限定された諸運動と混同されない。他の条件下ではこの運動は遥か彼方まで追求される。そこにこそまさにニーチェの視線が吸い込まれていったのである[(21)]。

この箇所において、バタイユはニーチェの思想の中にある「動態化」された生の哲学は、具体的な生の手段に回収し得ないものであると結論している。すなわち本来用途を持たないがゆえに爆発的な力を持つ「生の運動」を、ファシズムなど特定の「政治構成体」の運動にとっての有用な目的のなかに位置づけることは不可能であり、それゆえにニーチェを政治目的のために利用すること、つまり、バタイユ的な表現に従えば「有用性の領域」に引き戻してしまうことは、ニーチェの思想を歪めてしまうことにほかならない。従ってバタイユにとって、ファシストたちのニーチェ読解はニーチェを利用し歪曲するものでしかありえなかったのだ。だが、1930 年代のドリュ・ラ・ロシェルのニーチェ読解は、ローゼンベルグに代表されるような、バタイユが批判したファシストたちのニーチェ読解と軌を一にしているのだろうか。次章ではドリュ・ラ・ロシェルのファシスト期のテクストを取り上げることによって、その問題を検証してみたい。

4. ドリュ・ラ・ロシェル「マルクスに抗するニーチェ」

ドリュ・ラ・ロシェルの論文「マルクスに抗するニーチェ」は 1934 年末ドリュ・ラ・ロシェルがファシストを公言した政治評論集 『ファシスト社会主義』に収録されている。このテクスト自体は前年の 1933 年『ヌーヴェル・リテレール』誌 6 月 10 日付 556 号と 6 月 24 日付 558 号の 2 回に渡って掲載されたものを採録したものである。ドリュ・ラ・ロシェルが、ファシストを公言するのは 1934 年 2 月 6 日のスタヴィスキー事件に対する暴動直後のことであるから、この文章が執筆されたのは厳密に言えばプレ・ファシスト期であるといえる。実際、『ファシスト社会主義』に収録された 12 の論文のうちこの論文を含む 4 本が 1934 年 2

月以前に執筆され、すでに発表されたものである。しかしながら、ここではファシスト期のドリュ・ラ・ロシェルにとってのニーチェという思想家の重要性を考察するという視点から、決定稿といえる『ファシスト社会主義』に収録された版に基づくことによって、ファシスト期のテクストとしてこの「マルクスに抗するニーチェ」という評論を扱うことにする。

このテクストは、先に挙げたジョルジュ・バタイユの「ニーチェとファシストたち」の註の中に引用されている。

> 「ヘーゲル主義にも右派と左派があったのではないか。ニーチェ主義にも右派と左派がありえる。そしてすでにスターリンのモスクワとローマに。前者は意識的に、後者は無意識的にこの二つのニーチェ主義を示しているように思われる」（ドリュ・ラ・ロシェル、『ファシスト社会主義』NRF社 1934 年 71 ページ）「マルクスに抗するニーチェ」と題されたこれらの文が載ってる記事で、ドリュ氏は「労働者の粗暴な搾取に委ねられるのはニーチェの思想の残滓に過ぎない」と認めながら、ニーチェを、主導権をとる意志と進歩的楽観主義に対する否認に還元する[22]。

バタイユは、ここでドリュ・ラ・ロシェルがニーチェを利用する立場にマルクス主義の影響を受けた左派とファシストに代表される右派の立場があると分析していることに注目し、それに対しては一定の評価を与えているものの、結局はドリュ・ラ・ロシェルがニーチェをファシストの指導者の「主導権をとる意志」と「進歩的楽観主義に対する否認」というものに還元してしまっていると断じている。しかしながら、果たしてドリュ・ラ・ロシェルのニーチェへの態度は、バタイユのファシスト批判の中に包摂されてしまうものなのだろうか。

このテクストでは『ヌーヴェル・リテレール』誌 556 号に掲載された部分が（『ファシスト社会主義』では p. 63 から p. 69 の二段落目まで）マルクス主義とニーチェの思想の両立不可能性と共通点が考察された後、左派のニーチェ主義について分析がほどこされている。そして、同誌 558 号に掲載された部分が右派（この場合はファシスト）のニーチェ主義の分析に当てられている。

この前者の記事に相当する箇所においてドリュ・ラ・ロシェルは、左派のニーチェ主義を代表するのがレーニンとマルクス主義者時代のムッソリーニであり、

彼ら 2 人がニーチェが教鞭をとっていたスイスに関係があったことに注目している。

> さて、私は若きマルクス主義者であったムッソリーニがやってきて新たな空気を吸い込んだスイスにレーニンが住んでいたことに注目している。このスイスは確かにあらゆる意味において 19 世紀の末に哲学を完全に刷新し、ニーチェの天賦の才能がそのもっとも迅速な媒介となった精神に貫かれていた。（…）理性批判の哲学、反理性の哲学。行動の哲学、実証主義の哲学。ニーチェの思想、この詩人の哲学はベルクソンのような哲学以上に絶対的且つ効果的に芸術家や政治家たちの主要な動因となっている[23]。

この箇所において左派の政治活動の原動力となっているニーチェの思想とは、バタイユが指摘したのと同様に反理性の哲学であり、それがムッソリーニなりレーニンの原動力となっているとドリュ・ラ・ロシェルは述べている。しかし一方でドリュ・ラ・ロシェルにとってそのようなニーチェの思想は、マルクス主義が依拠するヘーゲル的歴史観や理性的決定論とは根本的に相容れないものである。従って、マルクスに影響を受けながらも、ニーチェの思想を行動の原動力として採用しているように見える彼らを左派のニーチェ主義者として扱うという一見矛盾するような操作が行われることになる。すなわち、ドリュ・ラ・ロシェルは多くのマルクス主義者が依拠する『資本論』や『共産党宣言』におけるマルクスとは別の「時事評論」内の言説や後期マルクスにおいて現れる、非理性主義・相対主義的な一面に注目し、そこにムッソリーニやレーニンを帰している。

> マルクスにおいてこの二つ［ヘーゲル的歴史主義と理性的決定論］の哲学はお互い分かち難くぴったり嵌まり込んでおり、鈍重なものとなっている。そして、常に他方で彼の精神の奥底で沸き立つが、決して他を制して優勢になることのなかった相対主義を、マルクス、そしてエンゲルスは更に進んで前面に置こうとしたが虚しい試みだった。存在へあまりに結び付けられたこれらの哲学を破壊することによって、この相対主義はマルクスとエンゲルスが年老いた時代に勝ち誇ったに過ぎない[24]。

このようにドリュ・ラ・ロシェルは、後期マルクスがヘーゲル的歴史主義と

理性的決定論の呪縛を逃れることによって辿り着いた相対主義の中において、ニーチェの思想との矛盾が解消され、レーニンや初期ムッソリーニといったマルクス主義者の運動の指針として採用されたとしている。

一方、右派のニーチェ主義の代表者はファシスト期のムッソリーニであり、ナチスのヒトラーである。ドリュ・ラ・ロシェルによればファシストは根本的にニーチェの思想の以下の点に依拠している。

> ニーチェが本質的に言っているのは以下のことだ。人間は、偶然に満ちた一つの世界の中の一つの偶然だ。世界は一般的意味など持っていない。世界は私たちがある時代に、私たちの情熱を、行動を発展させるために付与する意味しか持たない[25]。

このようにニーチェの思想をパラフレーズすることによって、仮象に過ぎない世界において、ファシストはニーチェの相対主義を、「情熱や行動」に移行させる政治運動の実践のための口実として利用することになる。そして、ここで述べられる仮象に過ぎない「世界の無意味性」というものから「プロレタリアの勝利へと至る世界の進歩」といったヘーゲル的なマルクス主義歴史決定論の否定、そして『権力への意志』に基づいた行動至上主義、さらに最大限の行動が可能な人間とその他の信奉者という指導者のエリート主義、というものに集約されるファシズムの特徴が帰結される。

ここに見られる言説は、まさにファシストの指導者に対する揶揄ともとれる『アセファル（無頭人）』という名を冠した雑誌において、バタイユが「ドリュ氏はニーチェを［指導者が］権力を取る意志へ還元してしまっている」と批判したファシストのニーチェ主義に特有のものである。ニーチェの単純化、または特定のテクスト・表現への還元によるニーチェの政治的利用の域をここで見られる言説は出ていないのだ。さらに、バタイユが『アセファル』誌で「ニーチェとファシストたち」という記事によってファシストのニーチェ利用を批判した 1937 年において、ドリュ・ラ・ロシェルはファシスト政党フランス人民党のイデオローグであり、バタイユが註の中で批判した『ファシスト社会主義』はファシスト期のドリュ・ラ・ロシェルの著作である。そのような背景から、

ここに書かれているドリュ・ラ・ロシェルの見解がニーチェを利用するファシストの思想の枠をなんらはみ出るものではない、とバタイユが考えても不思議はない。

しかしながら、ドリュ・ラ・ロシェル自身のニーチェ読解をこういった点のみに帰してしまうことには、留保が求められるように思われる。「マルクスに抗するニーチェ」の中で、科学者アンリ・ポアンカレや社会思想家ジョルジュ・ソレルや経済学者ヴィルフレド・パレートなど多岐に渡る領域に影響をあたえたニーチェを「流動性と行動の哲学者[26]」と形容していることから、バタイユにおいてと同様、ドリュ・ラ・ロシェルにおいてもニーチェは行動の哲学者であるとともに、ある種の絶対的な相対主義のなかで絶えず流動していく思想の哲学者であり、そのバタイユがいうところの「動態化」された流動的な「生の運動」は政治的な目的に「つかの間に」利用できるように見えようとも、結局はその枠組みをはみ出してしまうものである。実際、右派へのニーチェの影響について考察している箇所において、ドリュ・ラ・ロシェルは以下のように述べている。

> もちろん、この種のあらゆる影響という考えがあたえる深刻な誤解に先行して、これらの誤解をはっきりと意識すること無くして、ニーチェの著作の政治的影響について語ることはできない。ニーチェは詩人であり、芸術家なのだ。彼の教えはおよそ芸術家というものがそうであるように、多様な面をもち謎めいている。この教えは常に特定の政党や時代によって完全に所有されることから免れるし、常に何がしかの側面によって、他の時代のほかの政党に開かれつづけるだろう。（…）［ヘーゲル、さらにマルクスは彼らの弟子たちの怠惰な精神の犠牲者だということを］私は積極的に認めよう。私は現在行なっている省察を誤解されたくない。ニーチェ流相対主義にどっぷり漬かった私自身、特定の哲学（または特定の宗教）がある一つの方向を持った共同体によって、特定の社会的態度に永久に結びつくなどとは決して思わない。同じ哲学の中で、歴史は、対立し合う政治的立場のための支えを探すことができることを示している[27]。

こういった部分は、ドリュ・ラ・ロシェルが、ニーチェの思想を十全に政治に取り込むことは不可能であると考えていることを示している。弟子たちによっ

て教義化されたマルクス主義が、相対主義に移行した後期マルクスの思想を裏切っているように、この論文においてはドリュ・ラ・ロシェルが分析しているニーチェ主義とニーチェの思想とは峻別されるものに他ならない。実際、この論文の中で筆者は、思想というもの自体をすべて流動的な層において生成しつづけるものと扱っている。マルクスの思想はマルクス主義者が依拠する『資本論』や『共産党宣言』にとどまらない形で流動していくのと同様、またマルクス主義者で左派ニーチェ主義者だった初期ムッソリーニはファシストの右派ニーチェ主義に移行していく。さらに、ニーチェの思想そのものでさえも常に矛盾を孕みながら流動しつづけるものでしかありえない、としている。すなわち、あるときは理性的決定論に陥りそうになったり、またあるときはインドのカースト制度の外側に置かれた最下層の賤民であるチャンダーラを徹底的に差別し排斥することを規定したマヌ法典に、キリスト教的道徳に対置されるものとしてのアーリア的道徳を見出す個所において、一瞬、固定化とも思われるような相をもあらわす、と述べているのだ。

このように、ドリュ・ラ・ロシェルにおいて、ニーチェの思想というものは、バタイユが見たように政治的な運動においてその原動力となるという意味では利用可能なものである。しかし、その思想が孕む絶えず流動する激しい生の運動は政治的な領域に収まらず、絶えず遥か彼方まで続いていくものとして、ファシズムという特定の「政治構成体の運動」にとっての有用な目的への奉仕には収まりきらないものとも考えていると言える。実際、ファシストの右派ニーチェ主義者であるヒトラーは、ニーチェの思想の一部分に拘泥することによって、今述べたニーチェの本質的な部分を裏切ってしまっているとドリュ・ラ・ロシェルは断じている。

> 結局のところ、その自給自足経済体制、優生学的保守主義、固着化への危険を孕むドイツ精神というものの定義への意志によって、ヒトラーは残念なことにマヌ法典のニーチェに一致する。まさにここにこそ歴史の敏捷な皮肉が見られる。ヘーゲル主義の後、ニーチェ主義は停滞の言い訳になってしまうのだろうか[28]。

ファシストであることを公言した 1934 年時点のドリュ・ラ・ロシェルにとっ

て、プレ・ファシスト期のかなり早い時期から慣れ親しんできたニーチェの思想は、マルクスとマルクス主義の関係と同じように、ニーチェ主義という限定された枠内で利用可能なものであり、その後もフランス人民党へ入党し、更にはパリ占領後に対独協力者として政治参加していくときに依拠する立場となったことは否定できない。しかしながら、この「マルクスに抗するニーチェ」という論文が収録された『ファシスト社会主義』という政治評論集にはファシズムという自らの政治的立場を選択するまでの過程を書いた「一知識人の道程」というテクストが収録されており、ここでもドリュ・ラ・ロシェルは「ファシズムの雰囲気の中に満足を見出した」としているものの、一方で「ファシズムを避けられぬ社会発展上の一段階[29]」でしかない、と述べている。このような見解は、ファシズムを自らが拠って立つ政治的立場にすることのなかったバタイユが「ファシズムの心理構造」という論文でファシズムの強権的な国家形態などを批判しながらも、「ファシズムという出来事は、労働運動の存在意義そのものを係争の中に投げ込んだばかりだが、その事実だけでも、再度活性化された情動的な力に時宜を得て頼ることで何を期待できるか示すには、充分である」といい、「急進的な強権形態に、人間の生の解放を追求しつづける深々とした転覆の動きが対立する[30]」と結論づけた位置とさほど遠くない地点に立っているように思われる。すなわち、バタイユはマルクス主義の限界というものを示す「政治構成体」の運動としてファシズムというものを決して自らのものとすることはないとはいえ、過渡的なものとしてその存在の一側面を認めてはいないだろうか。そのことは、「ファシズムの心理構造」が発表された雑誌『社会批評』誌において、主宰者のボリス・スヴァーリンに、バタイユの思想が自分たちの「民主共産主義サークル」の一般的方向とは矛盾しているという疑念を抱かせたことなどにも表れているように思われる[31]。一方、「一知識人の道程」に述べられているように、前述のスヴァーリンの『社会批評』誌にも寄稿していたジャン・ベルニエといった左翼の友人たちに引き寄せられながらも[32]、ついには自らの拠って立つ立場としてファシズムを採用した 1934 年当時のドリュ・ラ・ロシェルも、その点においてはバタイユと同じような見解を示していたといえよう。つまり、ドリュ・ラ・ロシェルへのニーチェの影響を考察したタルモ・クナスが述べているように、ドリュ・ラ・ロシェルは、「マルクスに抗するニーチェ」

に見られるように、ニーチェ主義というものをマルクス主義よりはまともな相対主義であるとして[33]、それを援用したファシズムというものを「社会発展上の避けられない一段階」に過ぎないと断じながらも、自らが知識人として拠って立つ立場として、その限界を見定めた上でシニカルに採用しているのである。すなわち、ファシストの指導者たるヒトラーが、優生学などを肯定することによって危うい立場に陥っていることを認めた上でのファシスト側への政治参加を決定しているのである。それは、最初から失敗を運命付けられていることを承知した上での選択といえる。しかしながら、そもそもドリュ・ラ・ロシェルは、それまで文学者が特定の政治的立場に直接奉仕することにひたすら留保を示してきた作家である[34]。そのような作家にとって、「社会発展上の一段階」としてやがては他の政治的立場に取って代わられるようなファシズムという政治運動にシニカルな態度を持ちながらも奉仕して行くことが果たして必要だったのだろうか。この問いへの答えは同じ『ファシスト社会主義』に収められたエセー「一知識人の道程」の中に見出せるだろう。ドリュ・ラ・ロシェルの政治参加とは、まず何よりもガストン・ベルジェリ、ジャン・ベルニエなどの友人と交流を持ちつつ、自らの態度決定をしないままに、常に左翼と右翼の間を揺れ動きながら、知識人としてついには「責任をとり、極端なまでに身を危険に置く[35]」ための投企にほかならない。

> 私は中立ということが嫌だった。またそんなことはできるものではないと思っていた。私は、知識人の作品からは、いや芸術家の作品からさえも、深い政治的傾向が浮き出ているものと信じている[36]。

自らの作品に浮き出る政治的傾向というものに一つの名前を与え、それを自分の立場として引き受けること、それは確かに知識人として社会的な場においてある種の責任を引き受けることである。しかし、「どこから」声を発するのかという立場の選択は、同時に「どのような資格」に基づいて、「誰に向かって」「何を語るのか」ということの規定を必然的に孕むことになる。事実、文学作品とは個人的な儀式でありながら、特定の時代における社会の制度的な拘束体系に暗黙のうちに制約を受けた錯綜した織物である言表である[37]との主張を前

掲の引用から読み取れるようなドリュ・ラ・ロシェルでさえ、N.R.F.誌周辺に集う作家たちの一人なのである。しかし、その動かしがたい事実は、作家が属す時代においては、作家の言表は読まれることを目指す場において通約可能な言説として流通しなければ「作品」として成立しえない、とドリュ・ラ・ロシェルが考えていたことを如実に示している。ドリュ・ラ・ロシェルがファシストという立場を選択したこと、それは先に述べたように、プレ・ファシスト期からダニエル・アレヴィ周辺でニーチェの影響というものが「大気中に伝播」していた中でニーチェの著作を読みながら文学作品を書いていた彼が、そのような影響がニーチェ主義としてファシズムという「政治構成体」の運動の中に表れているのを見て、その誤謬を意識しながらも、自らの作品の政治的傾向とニーチェ主義が一致するものとしたこのドリュ・ラ・ロシェルの主張は、知識人として責任を取るための立場表明と考えられる。しかし同時に、それは今後文学作品を成立させるにあたって、その内容とともに書き手と読み手の関係にまで影響を与えることになるはずである。では、このような作家の置かれていた時代的状況と彼の作家としての資質を、ドリュ・ラ・ロシェル自身が充分考慮に入れていたとするならば、彼の考える「知識人」とはいかなる資格によってどのような位置から、またどのような場において、すなわちどのような読み手とどのような関係を結ぶことを考えていたのだろうか。そして、そのドリュ・ラ・ロシェルの政治参加の対象がなぜファシズムでなければならなかったのか。このような問いに答えるために、次はドリュ・ラ・ロシェルのニーチェ読解における他の側面に焦点を当てて考察する必要があるだろう。

5. 知識人、女、子供、老人、「奴隷の道徳」

ドリュ・ラ・ロシェルのファシズムを巡る言辞で読むものに違和感を覚えさせるもの、それは指導者との情動的な結びつきによる自己放棄である。実際、この種の「自己放棄」こそ、ニーチェを通してファシズムという「政治構成体」の運動の持つ意味の一面について近い見解を示したバタイユとドリュ・ラ・ロシェルの拠って立つ言説の場を、ファシズムの「外部」と「内部」に決定的に分け隔てた原因ともいえるだろう。1934 年 3 月 10 日の『ヌーヴェル・リテレール』誌 595 号に掲載されたエセー「偉人たちの季節」は、ファシズムの指導者

について考察されたものだが、その中では典型的ともいえる自己放棄の心性がドリュ・ラ・ロシェル自身によって述べられている。

> 人間は非常に弱く、非常に絶望的に感ずるとき、一人の首領を求めてやまないものである。そうした悲しむべき状態は世の中の優れた人々に、一人の人間でありながら他の人間に頼るというしぐさのもつ実に不幸な性格について深く考えさせるだろう。なぜならそこにおいては往々にして自己放棄が見られるからである。自分では自分を御することができないので、そうした男らしい努力を誰か他の人に譲るのである[38]。

実際、いや、そもそも、この引用箇所において読まれる「自己放棄」はドリュ・ラ・ロシェルのニーチェ読解の根本にあるのではないか。すなわち、子供の頃『ツァラトゥストラはかく語りき』を読んだときの体験、それについて「私はこの焔のような呼びかけに圧倒されてしまっていた。この男は私に何かを求めていた、私に何かを強く求めていたのだった。若さというものは何かに身を捧げるものであり、自分に身を捧げることを求める何者かを捜し求めるものである」と回想するような作家にとって、ニーチェとの出会いの決定的な体験の中においてすでに「自己放棄」という心性がニーチェの名とともに分かちがたく内包されていたのではないだろうか。このような指導者を前にしての「自己放棄」という心性は論文「ファシズムの心理構造」においてバタイユが否定する最たるものである。さらに、それは、ダニエル・アレヴィのニーチェ観――「ニーチェとヒトラーの夢は同じパースペクティヴを持った」とファシストのニーチェ主義に一定の理解を示しながらも、ヒトラーが「ヨーロッパ最後の貴族制、すなわちユダヤ人の貴族制を破壊した」とニーチェは断罪するだろうと述べて（アレヴィはユダヤ人であった）、常に「人は如何に気高くありうるかIst Veredung möglich?」という問題に一生涯固執しつづけた[39] ――とも根本的に相容れないものである。ドリュ・ラ・ロシェルの「マルクスに抗するニーチェ」においても、指導者とは「人間のエネルギーと社会の運動の核細胞」であり、「最大の行動ができる個人であり、エリートであり、主人となるものである[40]」と述べられている。ここで問題になるのは、両者拠って立つ立場は異なるものの、バタイユにしろアレヴィにしろ、ヒトラーやムッソリーニなどのファシストの指導

者のもつ特異な性質というものを、ニーチェとの関連において分析している点においては、ドリュ・ラ・ロシェルとそれほど変りはない。しかしながら、ドリュ・ラ・ロシェルの特異な点は、自らが指導者に対して、「悲しむべき状態」とは言いつつも「自己放棄」を積極的に行っている点である。すなわち、ニーチェの『道徳の系譜学』にみられるような「支配者の道徳」「奴隷の道徳」といった図式を持ち出すとすれば、アレヴィとバタイユではニーチェの著作の政治的な読解を認めるか否かという点に差異があるものの、両者とも自ら立場を投影するのはルサンチマンを行動原理とする「奴隷の道徳」の方へではあるまい。しかし、ドリュ・ラ・ロシェルにおいてはまさに後者の方へこそ自己を投影して行く身振りが見られるのである。

『道徳の系譜学』から「ルサンチマン」という概念を抽出し、詳細に論じたマックス・シェーラーによれば、「ルサンチマン」とは、他者に嫉妬する弱者が復讐することやその他者にとって代わることを絶対的に不可能だと感じた時に、価値の転倒を起こして憧憬の対象となっている他者の美点を無化するように働く心性であり、シェーラーは、ニーチェがその「ルサンチマン」についての概念をキリスト教の根本原理に見出したことに対して、詳細な批判を加えている(41)。だが、ここでは、シェーラー自身の論を追って行くよりも、シェーラーの論考を援用して、ファシズムと階級の問題を論じたジノ・ジェルマーニの以下のような分析が、ドリュ・ラ・ロシェルの「自己放棄」の産物ともいえる政治参加を理解する上での手がかりを与えてくれるように思われる。

> 「ルサンチマン」という概念は、動機や行動原因としてだけではなく、態度や価値決定の重要な要素だが、この概念はヨーロッパの思想では比較的長い歴史を持っている。ニーチェのいう「奴隷の道徳」はシェーラーによってさらに詳説された。シェーラーはその「ルサンチマン」の現象学の中で、ルサンチマンを生み出しやすい幾つかの代表的な役割や社会的状況を提言している。すなわち、彼の指摘では、女性——特に未婚婦人や義母——、老人、聖職者、およびここで挙げなければならないものとして「職人」のような伝統的中間階級（ルサンチマンへの傾きのより少ない近代プロレタリアートとは対照的である）がある。これらの社会的状況を、今日の社会学の用語に移し替えて、シェーラーは現実主義的な抱負との「不均衡」を特徴づけた(42)。

ジェルマーニは、ファシズムと社会階級について分析する際に、シェーラーの論から出発してスヴェント・レイナルフの研究を援用しながら、ファシズム運動に参加した階級の一つである「下層中間階級」というものに注目し、「ルサンチマン」とその表現はこれらの階級の地位に固有のものであり、危機の時代に活発化するものであると述べている。

さらに、ジェルマーニが触れているように、プロレタリアというものはマルクス主義において、歴史的決定論の枠組みの中で階級闘争を通して「プロレタリアの勝利」という自らの覇権を目標としているために、ある特定の階級や指導者に対して隷属しつづけることを余儀なくされた無力な存在ではなく、従って「ルサンチマン」という心性には傾きにくいのである。

ドリュ・ラ・ロシェル自身も『ファシスト社会主義』において、「マルクスに抗する」というタイトルの論文を「マルクスに抗するニーチェ」の前に置き、マルクス主義と「プロレタリア」という概念について考察を加えている。ドリュ・ラ・ロシェルは、マルクス主義を批判したこの論文の中で、「プロレタリアは指導者との個人的な関係から免れているがゆえに奴隷ではなく農奴でもない、理論的な独立性を持つ」存在だとし、また「職人」のようなものとは類別されると述べている(43)。「一知識人の道程」の中でプチ・ブルジョワの家庭に生まれたという出自を語ることからはじめ、「プロレタリアの神話」を否定したドリュ・ラ・ロシェルが、知識人として代弁している階級、また自らが声を発する場所はまさにジェルマーニの引用の中でシェーラーが定義している「ルサンチマン」という心性を孕んだ「下層中間階級」であり、「女」であり「老人」にほかならない。実際にそのことは、ドリュ・ラ・ロシェル自身が知識人としての自らの位置を定義する以下のような表現において、確認できるように思われる。

> かくして、女や老人や、また自分の商売とか仕事に没頭している人たちの代弁者たる知識人は、動物や植物の持っている神秘的で欺瞞的な無頓着さを身につけているのである(44)。

ドリュ・ラ・ロシェルにとっての「知識人」の政治参加とは、フレデリック・

グロヴェールによるガストン・ベルジェリへのインタヴューや[45]、ドリュ・ラ・ロシェルの小説『ジル』における 1934 年 2 月 6 日の暴動で、インターナショナルとラ・マルセイエーズが一緒に歌われるのを聞いた直後、ベルジェリがモデルとなっている代議士クレランスへファシズム政党の結党を働きかける場面にも見られるように[46]、政治家となった作家であるラマルチーヌやモーリス・バレスなどとは全く異なる性質を持っている。すなわち、その政治参加とは、知識人自らが直接政治闘争を通して行動に身を投じてゆくことではありえない。それは「ドリュの考え方は政治的というよりエロティックであるように思われる」というような感想をポール・ニザンに抱かせるように[47]、異様な情動性を行動する他者に投影[48]し、そこへ向かって自己放棄と思われるような奉仕をおこなう形でしか表れてこないのだ。ファシズムの担い手である「女」「老人」、そして作家自身の出身階級である「下層中間階級」というものは、「最大限の行動」ができるような他者と自己同一化できず、自分たちの主人に自己放棄によって奉仕するしかない無力な存在である。ドリュ・ラ・ロシェルの政治参加とは、そのような場から自分と同じく無力な者たちに対して、ニーチェの思想が孕む「動態化」の作用をファシズムという「政治構成体」の原動力として利用する指導者に託すような働きかけを、書く行為を通して行うことである。しかし、ルサンチマンという心性を孕む彼らは「神秘的で欺瞞的な無頓着さ」を身につけているのであり、指導者に対して自己放棄的な献身をするものの、それを持続的な態度として持つことはない。実際、「マルクスに抗するニーチェ」において、ファシズムがニーチェの思想を歪め固着化の危険を孕んでいることをドリュ・ラ・ロシェル自身見逃していない。ヒトラーに代表される右派ニーチェ主義者と一線を画するドリュ・ラ・ロシェルにとって、あくまでもファシズムというものは「社会発展上の一段階」にすぎない。しかし、ドリュ・ラ・ロシェルにとっての 1934 年のファシスト宣言とは、「責任を取り、極端なまでに身を危険に置く」投企に他ならない。したがって、この宣言は、やがてとって代わる次の時代の「政治構成体」の運動への参加を前提としたものではありえない。

「知識人」として作家であるドリュ・ラ・ロシェルは、ルサンチマンという心性を孕む読み手をニーチェ主義を採用するファシズムへと導き、彼らの「本能や意志」といったものを「動態化」させる。そして、ファシズムのもつ「動

態化」作用を利用しつつ、ニーチェ思想の固着化の危険を内包する「政治構成体」が創り出す言説の場を超えたところで、読み手に価値の転倒をおこさせることをドリュ・ラ・ロシェルは自らの政治参加の目的としていたのではないだろうか。すなわち、「社会発展上の一段階」にすぎないファシズムの後にやってくる次の時代の「政治構成体」へと読み手を導くのではなく、また絶対に同一化することのできない指導者の美点を無化することにとどまらず、再び政治的ではない言説の場において、書き手と読み手との関係を新たに結び、文学作品を成立させていくこと、それを目的としていたのではないだろうか。

6. 政治の彼方への視線

この『ファシスト社会主義』の中の「マルクスに抗するニーチェ」という論文と、そのプレ・オリジナルとも言える 1933 年 6 月に『ヌーヴェル・リテレール』誌に掲載された同名の論文を併せ読むと、一段落分まるごと削除されていることがわかる。すなわち『ファシスト社会主義』に採録された同名の論文においては、文学へのニーチェの影響というものをアンドレ・ジッド、マルロー、D. H. ローレンスと具体名を挙げて考察している部分が削除されているのである(49)。ここでは、同年発表されたドリュ・ラ・ロシェルによるローレンスについて書かれた他の文章と、「マルクスに抗するニーチェ」の決定稿ともいえるオリジナル版において削除された箇所を併せることによって、政治評論には現れないニーチェの影響を垣間見ることが出来るように思われる。

ドリュ・ラ・ロシェルは、この年ローレンスの『死せる男』のフランス語版をジャックリーヌ・ダルザスとの共訳で発表しており、その序文にはドリュ・ラ・ロシェルの手による以下のような文章が存在する。

> ローレンスの教えは、すぐには理解されえない。それはまさしく彼の繊細な複雑性によるものだ。しかしそれは有り余る豊かさから生じたものだ。それは感動的で人間的な筆致によって無尽蔵のニーチェの教えを強調することになるのである。
>
> ニーチェと同様にローレンスは芸術にその深い意味、すなわちその宗教的な意味、自然としての人間と社会的存在としての人間を繋ぐ役割を取り返す。ニーチェのようにローレンスは自然と社会の絆を結び直す。あまりにも理性的なキリスト教の彼

> 方に、またギリシアの理性的な哲学の彼方へさえも、彼は原始的な宗教の持っていた意味を見出す、すなわち彼は身体的な諸力と精神的な諸力との間の緊密な絆を感じているのだ[50]。

「マルクスに抗するニーチェ」のプレ・オリジナル版においても「ローレンスにとってもニーチェは一人の兄のように思われる。ローレンスがニーチェの本を読んでいないとは想像しがたい[51]」と述べられている。当時のドリュ・ラ・ロシェルはニーチェにとって芸術というものが持つ意味をローレンスの著作の中に見出しているのである。このことはドリュ・ラ・ロシェルにとってニーチェの思想の読解は政治的な言説にとどまらず、芸術を巡る言説に対しても有効であることを示している。すなわち、ニーチェ主義というものを採用してファシストとして政治参加する前年において「芸術」というものを考察する際にも、ニーチェの思想がドリュ・ラ・ロシェルに影響を与えていることが、この『死せる男』序文の引用から伺われるのである。さらに、ローレンスとニーチェの類縁性を指摘する文章が 1934 年の決定稿では削除されているものの、1933 年に発表された「マルクスに抗するニーチェ」という政治評論のプレ・オリジナル版のテクスト中に表れていることを考えれば、当時のドリュ・ラ・ロシェルにとって、ローレンスの作品に見出したニーチェが芸術に付与した意義と、政治的なニーチェ主義というものが密接な関係を持っていることが分かるだろう。ドリュ・ラ・ロシェルにとって、「芸術」とは「自然としての人間と社会的存在としての人間を繋ぐ役割を取り返す」ものにほかならなかったのだ。ドリュ・ラ・ロシェルはまさに芸術、すなわち彼の文学作品を通してそのような試みを行おうとしたのである。しかしながら、そのような試みが書き手と読み手との間で通約可能な「文学作品」を通して実現されるためには、ドリュ・ラ・ロシェルは作家としてこれまでとは違った立場を引き受けることによって、新たな言説が流通する場を読み手との間に創り出さなければならなかった。すなわち、ニーチェ的な芸術実践を行うためには、まずニーチェの思想が原動力となる「動態化」された「本能や意志」というものを持ち込めるような、ドリュ・ラ・ロシェルの作品が受容される場というものを創出せねばならなかったのである。そのために、ドリュ・ラ・ロシェルは、ニーチェ主義を採用するファシストの

「知識人」として、政治的な言説を通過することが不可欠であったのである。この段階において、ドリュ・ラ・ロシェルは、先に考察したニーチェを利用するファシストたちを批判したバタイユの立場に寄り添うような様相を再び呈する。すなわち、1934 年当時の作家としてのドリュ・ラ・ロシェルにとって、ニーチェの思想というものは、ファシズムという「政治構成体」の運動のために、一時的に利用することに究極的な意味をもつものではない。そうではなく、それは文学作品を通して、その思想が「動態化」した激しい生の運動を、政治的次元を超えた彼方まで追求してゆくために、特権的な重要性を持つのである。そのような態度は、ドリュ・ラ・ロシェルがファシスト宣言をした直後の文学作品の中において実際に確認できる。

「マルクスに抗するニーチェ」を『ファシスト社会主義』に収めて上梓した翌年の 1935 年 7 月号の N.R.F.誌に、ドリュ・ラ・ロシェルは「二重スパイ」という短編小説を発表している。これは、コミュニストと帝政ロシアのツァーリズムのグループとの間で二重スパイをしていた話者が処刑されるまでの過程を独白体で描いた作品である。この作品では、最後に話者はツァーリストの手先としてコミュニストの指導者を暗殺した廉でコミュニストたちに処刑される。しかし、話者はどちらの政治的立場をも自らのものとして引き受けることなく以下のように述べて死に赴く。

> 私は、あなたがたの機能、政治というものの敵だ。私はあなたがたとは別の問題の秩序の中で、あなたがたが決して踏み入れたことのなかった迷宮のなかで死ぬ。私はあなたがたが抱く種概念の区別に抗して、女たち、子供たち、老人たち、動物たち、植物たちとともにある。私は自然の中にいる。私は季節を奏でる道具だ(52)。

この引用箇所で話者は、前章で考察したファシズムの担い手である「女」「老人」といったルサンチマンを抱く人間の側に立っていることを語っている。しかし、性質として「神秘的で欺瞞的な無頓着さを身につけている」彼らはこの作品においては、既に政治的な次元を超えてしまっている。だが、そういった地点に立って初めて話者は「自然としての人間と社会的存在としての人間を繋ぐ役割」を果たすことができるのである。政治参加以降の作家としてのドリュ・

ラ・ロシェルが「芸術」に対して見出す意義、それはまさにこういった地点にこそ求められるのだ。さらに、ローレンスの『死せる男』の序文において述べられているように、その「芸術の持つ深い意味」、それは「宗教的な意味」「原始的な宗教の持っていた意味」といったものに重ね合わされてゆくのである。実際、「二重スパイ」の話者は先の独白に続けて以下のように述べている。

> おそらく私は司祭となって毎朝、神が死によみがえった場所にパンと葡萄酒を奉げているべきであったのであろう。さあ、私を殺しなさい。私は永遠だ(53)。

このように、1935 年、すなわちファシストを公言した翌年に発表されたこの小説の話者は政治的な次元を越え、ニーチェ的な芸術の意義を見出したとき、さらに超越的な遥か彼方へと向かっているのである。この小説の語り手と同じく、ドリュ・ラ・ロシェルがこのようなニーチェ的な「芸術の深い意味」すなわちその宗教的次元にまで達するためには、失敗を運命付けられたファシズムという「政治構成体」の運動への投企なくしては考えられない。ドリュ・ラ・ロシェルは、ファシストの知識人として政治参加を表明し「責任をとり、極端なまでに身を危険におくこと」によって初めて、文学作品の中で読み手とそのような次元を共有できるような地点に立てるのである。この作品に見られるような政治の彼方へ視線は、ドリュ・ラ・ロシェルの晩年の宗教への傾倒と地続きなものであろう。彼は晩年 1945 年の壊滅的な結末に向かって対独協力者として後には引けない立場に自分自身を追い込んで行く一方で、日記や小説作品において、古今東西の宗教史の研究を深めながら、このような彼方への視線をもちつづけた。そして、そういったときに絶えずニーチェの名が交錯していくのである。だが、その時ドリュ・ラ・ロシェル自身が 1934 年時点に考察していた政治に利用されるニーチェ主義の残滓をそこに垣間見ることはもはやないのである(54)。

註

（1） Tarmo Kunnas, *Drieu et Nietzsche*, in *Drieu La Rochelle*, Édition de l'Herne / coll. *Cahier de l'Herne* no. 42, 1982, pp.323-335 作家研究のシリーズ叢書エルヌの第 42 号ドリュ・ラ・ロシェル特集に掲載されたこの論文は、ドリュ・ラ・ロシェルへのニーチェの影響を考察した先行研究として重要である。クナスは、自身のニーチェ読解を通してドリュ・ラ・ロシェルの著作の直接ニーチェに言及していない箇所に至るまでニーチェの影響をつぶさに考察している。そして、クナス自身のニーチェ読解に基づいて、ドリュ・ラ・ロシェルのニーチェ読解の限界を結論づけている。本稿は、実際にニーチェ自身のテクストとドリュ・ラ・ロシェルのテクストを併せ読むことによって、ドリュ・ラ・ロシェルによるニーチェの著作に対するテクスト読解の精度を検証することは目的としていない（この問題に関しては稿を改めて考察したい）。そのため、クナス論文に関しては、その重要性は認めつつも、必要に応じて適宜言及するにとどめたい。

（2） Friedrich Wilhelm Nietzsche, *Ainsi parlait Zarathoustra* (traduit par Henri Albert), Mercure de France, 1898
1907 年当時、フランスでは『ツァラトゥストラはかく語りき』に関して二種類の翻訳が存在した。すなわち、W.P.というイニシャルの翻訳者によってソシエテ・ヌーヴェル社から 1892 年に発表されたもの（この版は「語りき」の部分が parla と単純過去形で訳されている）と、1862 年生まれのゲルマニスト、アンリ・アルベールの翻訳によって 1898 年にメルキュール・ド・フランス社から発表されたものである（Louis Pinto, *Les Neveux de Zarathoustra : La réception de Nietzsche en France*, Seuil, 1995, p.25）。テクスト中において、「メルキュール・ド・フランス社の黄色い表紙」と述べているため、ドリュ・ラ・ロシェルはアンリ・アルベールの翻訳による版を読んでいたと断定できる。しかし、1914 年で 29 版の重版を数えたこの翻訳本の第何版を少年時代のドリュ・ラ・ロシェルが読んでいたかは不明である。

（3） Pierre Drieu La Rochelle, *Encore et Toujours Nietzsche*, in *Sur les Ecrivains*, Gallimard 1964/1982 p.91. 以下 SE と略記

（4） *ibid*., p.92. なお引用文内の［ ］は論者の補足である。今後の引用部分における論者の補足については、これと同様の表記に従う。

（5） *ibid*.

（6） *ibid*., p.94

（7） Drieu La Rochelle, *État civil*, Gallimard, 1921, coll. *L'imaginaire*, 1980, p. 108

（8） Drieu La Rochelle, *Mesure de la France*, Bernard Grasset, 1922/1964, p. 35. ドリュ・ラ・ロシェルがニーチェのテクストから引用した部分は以下の通り。

Il importe de l'exprimer, une grande victoire est un grand danger. La nature humaine supporte plus difficilement la victoire que la défaite. J'inclinerais même à penser qu'il est plus aisé de remporter une pareille victoire que de faire en sorte qu'il n'en résulte pas une profonde défaite.

（9） Tarmo Kunnas, p.325

（10） Drieu La Rochelle, *Genève ou Mosco*u, 1928, in *Le Jeune Européen suivi de Genève ou Moscou*, Gallimard, 1978, p.186

（11） *Littérature*, No.18, Mars, 1921, p.7
そもそも大部分の作家に関して彼らはそれほど高い平均点を付けているわけではない。しかし、この平均点は、アポリネール、ランボー、サドと 10 点を超える平均点を得ている作家や、ミュッセ、ラマルチーヌといった際立ったマイナス点を付けられて作家とは違い、ニーチェがパリ・ダダ・グループ全体の思潮にとって等閑視された存在であったことを示している。

（12） Drieu La Rochelle, *Nietzsche contre Marx*, in *Socialisme fasciste*,1934, Gallimard, p.70. 以下 SF と略記

（13） Louis Pinto, *Les Neveux de Zarathoustra—La réception de Nietzsche en France*, Seuil, 1995

（14） Georges Liébert, *Daniel Halévy et Nietzsche*, *Commentaire*, no.18, 1995, p.829

（15） Drieu La Rochelle, *Journal* 1939-1945, Gallimard / coll. Témoins, 1992, p.382 以下 Journal と略記

（16） Dominique Desanti, *Du dandy au nazi*, Flammarion, 1992, p.224

（17） Georges Sorel, *Réflexions sur la violence*, M. Rivière, 1908
この著作の最終章である第六章「生産者の倫理」の第三節に、ニーチェへの言及がある。ここでは、『道徳の系譜学』を引用しニーチェ的な強者の道徳をプードン的家族愛に結び付ける形で革命的サンディカリストの戦士の道徳を構想している（邦訳：木下半治訳、『暴力論』下巻、岩波書店、1984 年（第 14 版）pp. 147-160）

（18） Georges Bataille, *Nietzsche et les Fascistes*, in *Œuvres complètes* t.1, Gallimard, 1971, p.447. この記事においてバタイユは、ニーチェに惹かれた左翼として、ジャン・ジョレス、ニーチェの『人間的な、あまりに人間的な』を 1899 年に仏訳したブラックことアレクサンドル＝マリー・デルソー、ジョルジュ・ソレル、フェリシアン・シャレイエの名を挙げている。しかし、ファシスト期のムッソリーニを筆頭にファシズム運動へ多大な影響を与えたサンディカリストであるジョルジュ・ソレルや、後に左派平和主義を捨ててガストン・ベルジェリの下で極右的な立場を表明するシャレイエを単純に左翼と分類してよいものか異論の余地は残るであろう。

（19） *ibid*., p.451. この箇所は原文を以下に記す必要があるように思われる。

L'enseignement de Nietzsche « mobilise » la volonté et les instincts agressifs : il était inévitable que les actions existantes cherchent à entraîner dans leur mouvement ces volonté et ces instincts devenus mobiles et restés *inemployés*.

（20） クレーナー社の現在でも手に入る『権力への意志』のポケット版の後書きを書いているボイムラーは、死後ニーチェの遺稿を編集して出版されたこの本によって一般的なニーチェ像の定着に寄与した。この本は妹のエリザベートの偽りの編集作業が疑われている。従ってニーチェのクレーナー版に全集はニーチェが自ら出版した部分を除いては学問研究やゼミナールの教材としては使用不可能であるというべきであろう。（大石紀一郎他編『ニーチェ事典』弘文堂、1995 年 pp. 719-720）

（21） Bataille, *Nietzsche et les Fascistes*, p.464

（22） *ibid*.

尚、「主導権をとる意志」と「進歩的楽観主義に対する否認」という表現はフランス語原文において、 « la volonté d'initiative »、« la négation de l'optimisme de progrès »となっている。

（23） *Nietzsche contre Marx*, in SF, p.64.この「マルクスに抗するニーチェ（*Nietzsche contre Marx*）」というタイトルは、1899 年アンリ・アルベールによってメルキュール・ド・フランス社から翻訳出版されたニーチェの著作『ニーチェ対ワグナー（*Nietzsche contre Wagner*）』から借りてきたものではないか、との解釈も可能であろう。確かに『ファシスト社会主義』においては、このエセーの前に「マルクスに抗する」というタイトルのエセーが収録されてはいるが、先に執筆されプレ・オリジナルのテクストとして雑誌に発表されたのは「マルクスに抗するニーチェ」の方であるからだ。実際にワグナーに心酔していたニーチェがその影響を乗り越えて書いた著作と、このドリュ・ラ・ロシェルのエセーを併せ読むことは興味深い試みかもしれない。しかし本稿では以上の指摘にとどめておく。

尚、ベルクソンとニーチェ、そしてあとでドリュが関係づけるポアンカレへの影響、共通点には René Berthelot, *Un Romantisme utilitaire : Essai sur le mouvement pragmatiste*, t.1, *Le pragmatisme chez Nietzsche et Poincaré*, Paris, Alcan 1911 ； t.2 *Le Pragmatisme chez Bergson*, Paris, Alcan 1913 参照。（Louis Pinto, *Les Neveux de Zarathoustra*, op.cit., pp. 38-40）

（24） *Nietzsche contre Marx*, in SF, pp.67-68

（25） *ibid*., p. 70

（26） *ibid*., p. 66

（27） *ibid*., pp. 69-71

（28） *ibid*., pp.74-75

（29） *Itinéraire*, in SF, p.234

（30） Bataille, *La structure psychcologique du fascisme*, in *Œuvres complètes* t.1, 1970, p.371. この論文は『社会批評』誌第 10 号（1933 年 11 月）と第 11 号（1934 年 3 月）にまたがって掲載されている。特にこの引用部分は 1934 年 2 月 6 日のスタヴィスキー事件の暴動直後に発表されたことを考えると一層興味深い。

（31） Boris Souvarine, *Critique* sociale, no. 7, Jan 1933 このような言辞は「ファシズムの心理構造」の掲載に先立つ 1933 年 1 月『社会批評』誌第 7 号に掲載されたバタイユの論文「消費の概念」冒頭部分のスヴァーリンによる断り書きなどにみられるだろう。

（32） この政治学院時代以来のドリュ・ラ・ロシェルの友人であり 1920 年代に『クラルテ』誌を主宰していた左翼知識人であったジャン・ベルニエに関して、「一知識人の道程」の中では「ジャン・ベルニエの友情は私の一生を左右している」と書かれている。（*Itinéraire*, in SF, p. 242）

（33） Tarmo Kunnas, p.334

（34） 例えばドリュ・ラ・ロシェルがアンドレ・ブルトンらのシュルレアリストのグループと袂を分かったのは、1925 年にグループが「政治化」したことが原因であった。1920 年代においてドリュ・ラ・ロシェルが当時の文学サークルとの係わり合いを通して「政治」と「文学」の関係についてどのよう考えを持っていたかについては、拙稿「ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル」（早稲田大学大学院 1997 年度修士論文）参照のこと。

（35） *Itinéraire*, in SF, p. 243

（36） *ibid*., p. 237

（37） Dominique Maingneau, *Genèse du discours*, Pierre Mardaga / coll. *Philosophie et Langue*, 1984, p. 150

（38） Drieu La Rochelle, *La Saison des Grands hommes*, in *Les Nouvelles Littéraires*, No.595, le 10 Mars 1934, p.1

（39） Georges Liébert, *Daniel Halévy et Nietzsche*, op.cit., pp.835-836

（40） *Nietzsche contre Marx*, in SF, p.72

（41） Max Scheler, *Vom Umsturz der Werte*, Leipzig, 1923（邦訳：吉沢伝三郎他訳『価値の転倒（上）』「道徳の構造におけるルサンチマン」シェーラー著作集 4、白水社、1977 年）

（42） Gino Germani, *Fascism and social class*, in Stuart Joseph Woolf (ed), *The Nature of Fascism, Proceedings of a Conference held by the Reding University Graduate School of Contemporary European Studies*, Weidenfeld and Nicolson, 1968（邦訳：斉藤孝 監訳『ファシズムの本質』大光社 1970 年）p.81

（43） *Contre Marx*, in SF, p.9

（44） *Itinéraire*, in SF, p. 237

（45） Pierre Andreu et Frédéric Grover, *Drieu La Rochelle*, Hachette, 1979 / coll. *La Table Ronde*, 1989, pp.467-468

（46） Drieu La Rochelle, *Gilles*, Gallimard, 1939/1943 (version intégrée) / coll. *Folio*, 1994, pp. 591-604

（47） Paul Nizan, *Pour une nouvelle culture*, Grasset, 1971, p.186

（48） このドリュ・ラ・ロシェルの作品における「情動性（affectivité）」の問題は重要である。拙稿「ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル『二重スパイ』における話者のアイデンティティについて」（『フランス文学語学研究』第 20 号早稲田大学大学院「フランス文学語学研究」刊行会、2001 年、pp.147-162）を参照されたし。

（49） *Nietzsche contre Marx*, in *Les Nouvelles Littéraires*, No.556, le 10 Juin 1933, p.1

（50） *D. H. Lawlence*: un prophète, in SE, p.116

（51） *Nietzsche contre Marx*, in *Les Nouvelles Littéraires*, op.cit., p.1

（52） Drieu La Rochelle, *L'Agent double*, *NRF*, no. 212, Juillet 1935, p.37. この作品は 1943 年から 1944 年にかけてドリュ・ラ・ロシェル自身の手直しを経て死後刊行された『不愉快な物語』（*Histoires déplaisantes*, Gallimard, 1963 / coll. *L'imaginaire* 1991, pp.109-142）に採録されている。

（53） *ibid.*この引用文に表れる「神」とは「パンと葡萄酒」という表現からキリスト教を連想させるが、un dieu と形容され明らかに相対化された存在でしかない。この点についても前掲の拙稿「ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル『二重スパイ』における話者のアイデンティティ」を参照のこと。なお、ここに見られる「聖職者」というものも、先の引用 42 におけるジェルマーニの文章の中でシェーラーが「ルサンチマン」という心性を持ちやすい階級の一つに分類していることを加えてここに指摘しておきたい。

（54） 1940 年 6 月 14 日のナチス・ドイツによるパリ陥落に先立つ 5 月 29 日、ドリュ・ラ・ロシェルは日記に以下のように記す。「私はバッハやモーツアルト、ゲーテの一部分（私はほとんどゲーテを知らない）、ノヴァリス、ヘルダーリン、ニーチェが好きだ。しかし、それは私の政治的態度とは何の関係も無い。（*Journal*, le 29 Mai 1940, p.255）」ドリュ・ラ・ロシェルが対独協力を表明するのは、同年 9 月 15 日『ラ・ジェルブ』誌上でのことである。しかし、この日記の文章からはドイツの文化に惹きつけられている様子は伺われるものの、1934 年「マルクスに抗するニーチェ」において考察したような、ニーチェの思想とドリュ・ラ・ロシェル自身の政治的態度を結びつけることは既になくなっていることが分かるだろう。

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第 3 号（2002 年 3 月発行）に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html